

書 評

鷺山茂雄著 『源氏物語の語りと主題』

原 岡 文 子

『源氏物語の語りと主題』は、鷺山氏の前著『源氏物語主題論——宇治十帖の世界——』（塙書房、一九八五年）をも包括しつつ、前著の問題意識を、大きく『源氏物語』の世界全体に発展させ、「語り」の構造と、「主題」とを究める大著である。約六〇〇頁から成る本書は、周到に、そしてまた肌理細やかに、『源氏物語』の表現に即しながら、その仕組みと、「主題」に熱く迫ろうとする。末尾に置かれた「初出論文一覧」によれば、本書は一九七四年に始まる著者の三〇余年の研究の歩みをまとめる形となっているが、期せずして現在最も新しく切実な問いかけを促す意義を負うものとなった、という実感がある。「文化研究」の一貫としての文学研究の大きなうねりが続く一方で、今日、「言葉の構造体」として、文学表現の魅力を見直そうとする動きがあらわれてきている（安藤宏氏発言「座談会 虚構のリアリティ」『文学』二〇〇七年 一・二月号）という新たな現象が浮かび上がる。その意味での「原点回帰」を問いかける本書には、まことに新鮮な深い魅力が湛えられていると言えきだろう。

まず本書の構成を顧みたい。「第一章『源氏物語』の「語り」の論」「第二章『源氏物語』の「作り方」「作られ方」「第三章

光源氏晩年の物語の分析」「第四章 宇治十帖主題論」「第五章「夢の浮橋」考」の五章から成っており、これに全体の問題意識を手際よく整理する、「序章『源氏物語』の「語りと主題」の論のために」と「終章『源氏物語』主題論の試み」が付される。ただしそれぞれの章は、必ずしもほぼ均等な分量、「節」を持つものではない。最も大きな差を示す例を挙げれば、第一章は、第一節「『源氏物語』の「語り手」と「語られた物語」（七項から成る）第二節「『源氏物語』の「語り」文の分析」（十三項から成る）の二節を併せ、全体で六七頁の分量だが、続く第二章は第一節「桐壺」巻の分析」に始まり第十一節「螢兵部卿宮のこと」に至る二四三頁に及ぶ。形式上のことながら、それぞれの章の分量の極端な差異は、本書の全体像の把握をやや分かりにくいものとするきらいのあることは否めない。けれども実は、この分量等の差異こそが、本書の関心、主張の眼目を自ずから語るものなのでもあった。

『源氏物語』が「古女房の「語り」の体」（三頁）を取るものである以上、それを「読む」ためには、「語り」の説明を避けることはできない。だからこそまず、玉上琢彌氏から三谷邦明氏等に至る研究史を顧みた上で、「語り」や「語り手」に目を向けることが求められる。けれどもそれは「語り」論の新たな構築に向けての作業であるよりは、むしろ「語り手」により「語られた物語」が何を描こうと志向しているのかを測定する一つの基準」（二五頁）を探ろうとする試みである、というのが本書の立場にはかならない。即ち「語り」「語り手」「語られた物語」の視点を積極

的に導入し、この物語の「作り方」「作られ方」を観察（六八頁）する作業が、本書の基本的な立脚点であることと、先に触れた章による分量のばらつきとは自ずから響き合おう。本書は「何がどのように描かれているのか、何をどのように描いているのか」（五八―一頁ほか）との、「語り」の視座を踏まえての『源氏物語』をめぐる主題研究にはかならない。

その中でとりわけ本書が重く見据える問題は、まず藤壺、そして紫上をめぐる物語のモチーフと言えようか。例えばいわゆる「もののまざれ」を論究する「書かれなかつた最初の藤壺事件」の副題の付された、第二章第二節「帚木」三帖の「語り手」は、光源氏の藤壺思慕を「知らなかつた」語り手を新たに登場させ、朧月夜や空蟬をはじめとする女君たちとの交渉の断片から結果的にそれを自ずと浮かび上がらせる、物語の巧妙な仕掛けについてまず解き明かす。藤壺をめぐるこの絶妙な仕掛けにこそ、醜悪なものにもなりかねない密事を、神秘的な美の世界に昇華させたという意味で、『源氏物語』の本質が大きく託されたのだという。

さらに、「若紫」巻の紫上への思いの背後に横たわる藤壺思慕の重さを説く、第四節「紫の君の頃の物語」、そして紫上を、夫光源氏の藤壺思慕を「知る」存在と読み解く七節「賢木」巻の雲林院籠りの贈答歌をめぐる問題」などを通して、本書は、物語に潜められた藤壺、そして「紫のゆかり」の軸の意味の深さを鮮やかに提示して興味深い。

一方、六節「葵」「賢木」両巻の女君達」においては、車争い事件が、秘められた藤壺思慕を決して「知ら」されることのない

かつた、葵上と六条御息所という二人の女君により、「光源氏の愛の十全を求め」る思いから起こされたものとして読み解かれている。つまり本書に通底するのは、藤壺に関する秘事に関しての、「語り手」により読者に与えられた情報量と、各登場人物のそれとの差異によって自ずともたらされる、物語の妙味の別扶への熱い意思にかならない。「語り」と「主題」という視座は、その意味でまことに必然的な結びつきをもつて、新たな読みを導く結果となった。なお九節「朝顔」「少女」両巻の桐壺院姉妹」の、女五宮と大宮という老女達の存在意義を、光源氏の藤壺呪縛からの解放に見る視座に、とりわけ興味を掻き立てられたが、紫上を朝顔の姫君と「身分格差は事実上ない」と捉える条にやや疑問が残ったことも付け加えておく。

ところで第二章に目に付く言葉の一つに、「知る（者）」「知らぬ（者）」がある。「知る者」、即ち「常にすべてを掌握する超人」として生かされる光源氏、藤壺思慕を「知らぬ」葵上や六条御息所、また「知る」紫上、そしてそうした登場人物の位相を炙り出す「語り手」たち…、「知る」「知らぬ」は論の展開の鍵語ともなっている。さらに「知る」「知らぬ」は、続く三章第二節「柏木死後の物語」において、女三宮をめぐる密事を「知る」光源氏に対する、「知らぬ」者としての夕霧の果たす、狂言回しの役割の見取り図をも掘り起こす。やがて「横笛」巻末以降、「知る人」となった夕霧を通して、密事の、時間による浸食の様相を見据えるのが、とりわけ「夕霧」巻の主題と捉えられる時、傍流の物語にも見えた当該巻は、全体の中での意味を新たに放ち始める。さ

らに過去、未来を併せ「知る」超人光源氏の、「若菜」上下巻における、厳然たる「老い」の様相、とりわけ下巻での内側から捉えられる「老い」の問題を説く、第一節「若菜上」「若菜下」両巻の時間的考察を含め、本書の第二部へのまなざしは、流れる「時間」に注がれ、静かな説得力に溢れる。

四章の宇治十帖論は、こうした正篇、そして第二部論の中から必然的に紡ぎ出されたものと言えようか。「幻」巻と「匂宮」巻との間に置かれた八年間の年立ての空白にまず言及する、第一節「光源氏没後の物語の構造」においては、「残していった者」を常に意識し続ける「残された」者達の生きる軌跡、という第三部、宇治の物語の基本的な構図が示される。それは、夕霧の物語の伝える、女三宮事件の時の流れの中での風化と響き合いつつ、刻まれた新たな物語であったという。本書の宇治十帖論が、執拗に解きほぐすのは、そうした正篇、過去の時間、物語との照応、或いはまた「ずれ」の命題である。そこでの最大の関心が、薫と柏木との関わりにあることは当然の成り行きとも言えよう。「父柏木と繋がり結ばれている（第二節）薫故に、父の「犯し」が大君との恋の齟齬として報いる結果を生み、さらに展開される浮舟の密通、入水も「薫が父の罪を負い、その果てを摘む物語として逆照射され」（第五節）るのだという。光源氏と藤壺、柏木と女三宮、そして薫へ、という密事をめぐる物語の骨格を、こうした見取り図によって照らし返す本書は、『源氏物語』の核となるものを見事に整然と実感させるものとして、何よりも重い意義を持つ。

或いはまた例えば第四節「薫と中君」の、六君の結婚問題、そ

して玉鬘の系譜に位置づけられる中君の個性などから、柏木の実子たる薫の、密通回避の構図を読み解くスリリングな検証の展開など、本書の魅力には尽きないものがある。その意味での読後の充実感を噛み締めつつ、一方で、この見取り図から零れ落ちるものをなお見据える作業こそが、本書の読者に与えられたさらなる課題なのだと考えずにはいられない。例えば「女の物語」としての浮舟をめぐる主題の重さ、といった事柄もその一つと言えようか。その場合、心してかからなければならぬ問題についても、本書は繰り返し提示する。『源氏物語』を読むということは「遊び」にほかならない（序章）のであって、『源氏物語』の「神秘化」、そして「教戒主義」を遠ざけること（第二章付節）が、まず「読む」こと、研究の必須の条件なのだという。「遊び」の「ルール」を熱く求め続ける本書の姿勢、「教戒主義」批判を、研究に携わる者は自戒をもつて受け止めなければなるまい。

最後にやや違和感を覚えた小さな事柄について二つほど記し置くことをお許しいただきたい。新潮古典集成によるものとされる『源氏物語』本文等の引用箇所には、頁の明記が求められるのではないかと、というのが第一点、二点目は「明石上」の呼称に関する疑問である。底本である集成の呼称に拠ったものであろうが、現在の研究では「明石君」が圧倒的に多く使われているのではないかと。研究史に大きな足跡を残す本書であるだけに、あえて些末な瑕瑾を挙げつらう結果となった。また評者の思いこみによる誤読もさぞ多からう。すべてご寛恕を願うほかない。

（二〇〇六年四月 武蔵野書院 A5判 五九九頁 税込一五七五〇円）